

つながる

Tsu-na-ga-ru

1

月号

2021
January
No.04



SPECIAL REPORT

中日新聞「リンクト」
LINKED
plus+
病院を
知ろう

口から食べる幸せを、 チームで守る。

摂食嚥下障害特集

CONTENTS

- 1 治療を学ぼう
- 2 チーム医療を知ろう
- 3 地域医療を学ぼう!
- 4 最新TOPICS
- 5 HOSPITAL NEWS

院長メッセージ

食べることは人生の楽しみであり、健康の原点ともいえます。当院では「口福を守るE.A.T」の愛称のもと、栄養・嚥下・口腔機能に問題のある方、今後問題となることが予測される方に対し、各専門医療チームが連携して活動しています。今号では、「口から食べる幸せを、チームで守る」をテーマに、当院の摂食嚥下栄養サポートチームをご紹介します。

SPECIAL REPORT

口から食べる幸せを、 チームで守る。

摂食嚥下障害特集

さまざまな診療科、専門職の力を結集し、
飲み込む機能の衰えた患者をサポートする。



CHAPTER 01 多様な診療科が関わり 摂食嚥下障害をサポート。

食えることは人生の楽しみである。だが、加齢などにより嚥下（飲み込む）機能が衰えると、食べ物にむせたり、誤嚥（唾液や食べ物が入ること）するようになり、やがて、高齢者の命に関わる病気である（誤嚥性肺炎）を繰り返すようになる。そんな状態から脱するために、昨年、慢性的な誤嚥に苦しんでいた90代の男性患者が、ある決断をした。それは「話すことができなくなってもいいから、手術して食べる機能を取り戻す」ことだった。この誤嚥防止手術を執刀した、都築秀典（耳鼻咽喉科統括部長）に話を聞いた。「これは簡単に言う、喉にメスを入れ、気道と食道を分離する手術です。誤嚥を完全に封じ込める反面、発声の機能を失ってしまいます。この患者さんはそれでもいいと、手術を選択されました。今では一日3回、食事を楽しめ、元気に暮らしています」。このように耳鼻咽喉科では喉の機能を診て、病変はないか、飲み込めない原因が隠れていないかを診断し、患者の希望を最優先にして適切な治療に繋いでいる。

耳鼻咽喉科が（喉）の専門家として、嚥下障害に関わるのに対し、歯科口腔外科は（咀嚼（食べ物を噛む）機能の専門家として関わっている。齊藤輝海（歯科口腔外科統括部長）は次のように話す。「嚥下機能

CHAPTER 02 多くの専門職が力を合わせ 「食べる機能」の改善をめざす。

齊藤はまた、院内に組織された多職種による（摂食嚥下栄養サポートチーム（詳しくはP.2参照）のリーダーも務めている。「嚥下障害に対しては、医師だけでなく多職種の関わりが非常に重要です。摂食嚥下栄養サポートチームでは、嚥下リハビリテーション、口腔ケア、栄養サポートという3つの側面から、患者さんの食べる機能を守るために努力しています」（齊藤）。

そのなかで嚥下リハビリテーションを担当するのは、言語聴覚士の長尾恭史と田積匡平である。「私たちは主に、飲み込む機能の回復を促す訓練を担当することにも、衰えた嚥下機能を補う食事の方法を提案しています。管理栄養士と一緒に食事の形態を考え、どんな姿勢や食べ方であれば、安全に食べていただけるか検討しています」と、長尾。その言葉にも表れているように、この取り組みでは（食べることを）何よりも重視

BACK-STAGE

在宅療養している人の （食べる楽しみ）も守る。

●食えることは人生の楽しみであり、健康の原点である。嚥下機能が衰えると、体重減少、低栄養、脱水、さらに誤嚥性肺炎に繋がっていく。

●岡崎市民病院はその重要性を熟知し、院内に多様な専門医、専門職が連携してサポートする体制を構築してきた。そしてその活動を地域へと広げつつある。同院がロールモデルとなり、在宅療養する人々の嚥下機能や口腔環境、栄養状態を守る取り組みが根づいていくことに期待したい。



の衰えた患者さんに対し、まずは、内視鏡を用いて飲み込む機能を調べる嚥下内視鏡（VE）検査などを行います。その上で、咀嚼機能に問題がある場合は、私たちが入れ歯など口腔内の治療を担当します。さらに、舌や顎の筋肉が衰えていないかチェックして、どんなリハビリテーションに取り組むべきかチームで検討しています」。さらに同院では、腎臓内科、外科、脳神経内科、皮膚科などの専門医たちも摂食嚥下障害の治療に携わっている。これほど多くの診療科が関わるのは珍しいのではないだろうか。「摂食嚥下障害は単独で引き起こされるのではなく、器官の機能低下や何らかの病氣によつて起こるため、診療科を横断したアプローチが必要で。患者さんを中心に据えて、必要な医療をすべて結集できるのは当院の強みだと思います」と齊藤は話す。

COLUMN

●高齢になり心身の機能や活力が衰え、虚弱になった状態を（フレイル）という。同じように、口腔機能が低下することを（オーラルフレイル）といい、要介護認定が2.4倍、総死亡リスクが2.1倍に上がるともいわれる。

●摂食嚥下栄養サポートチームでは、歯科衛生士が中心になり、口腔機能の低下を防ぐために専門的なケアを実践。さらに、市民講座などを通して、地域高齢者のオーラルフレイルの予防にも取り組んでいる。

している。「やはり誤嚥を繰り返す方は筋力が衰えているので、しっかり食べて栄養をとることが基本です。その点、当院では栄養サポートチームと一緒に活動しているのでも心強いですね」と田積は補足する。

多くの診療科と専門職が関わり、（口から食べる機能）を守るために力を尽くすメンバーたち。齊藤は、その取り組みをさらに地域へと広げていく考えを持つ。「入院中に嚥下機能がかなり改善しても、自宅に帰ると元に戻る患者さんが数多くいらっしゃいます。そうならないように、在宅医療の現場でも継続してサポートしていきたいんです。すでに摂食嚥下障害看護認定看護師や言語聴覚士などが介護施設などに出向き、食事のアドバイスをしたり、勉強会を開催しています。そうした取り組みにもっと力を入れ、地域の方たちを支えたいですね」（口から食べる幸せ）を、院内から地域全体へ。その大きな目標に向かって、齊藤たちはこれからますます摂食嚥下栄養サポート活動に邁進していこうとしている。

治療を学ぼう

今回のテーマ

嚥下機能改善手術と誤嚥防止手術

嚥下機能改善手術・誤嚥防止手術とは？
リハビリテーションでは改善が見込めない嚥下障害に対して、耳鼻咽喉科で行う外科的治療です。

飲み込む機能を改善する 〈嚥下機能改善手術〉。

嚥下機能改善手術は、喉(のど)を温存しつつ、嚥下(飲み込む)機能を改善し、口から安全に食べられるようにする手術です。

たとえば、高齢になると、喉のゴックンをするタイミングがどうしても遅くなります。そういう場合は、手術で喉の骨の周辺を持ち上げることで、飲み込みに関わる働きを改善することができます。また、病気によっては、食べ物を食道の入り口まで持っていても、筋肉に力が入らず、そこから先に食べ物が入っていきません。その場合は、食道の入り口の間口を少し広げて、食べ物を送りやすくします。こうした嚥下機能改善手術は、喉の構造をある程度保つことができるので、発声機能を守ることができます。この働きがもう少しあれば食べられるようになる、という場合に提案する治療法です。



誤嚥を完全に防ぐことを 目的にした〈誤嚥防止手術〉。

誤嚥防止手術は、喉の構造を変えて、誤嚥(食べ物が気管に入ること)を完全に防ぐ手術です。食べ物や唾液などの液体が気管から肺に入り、誤嚥性肺炎を繰り返してしまうケースや、自分の唾液を飲み込むだけで誤嚥してしまう場合は、リハビリテーションだけでは限界があります。そういう場合の選択肢として提案しています。

手術では誤嚥を防ぐために、手術で気管の上にある声を出す部分にアプローチして、気道と食道の経路を完全に分離させます。手術後、患者さまは誤嚥の苦しみや肺炎のリスクから解放され、安心して口から食べられるようになります。但し、喉頭の形を変えるため、発声機能を失ってしまいます。会話によるコミュニケーションができなくなることをご理解の上、手術を受けていただく必要があります。



Doctor's message



耳鼻咽喉科統括部長
都築秀典

**喉の機能を正しく診断し、
最善の治療法を提案しています。**

高齢社会の進展に伴い、誤嚥性肺炎を繰り返す高齢患者さんが増えています。そういう方に対し、耳鼻咽喉科では、食べ物を食道に送り込む(喉)の機能に問題はないかを調べて、適切な治療に結びつけています。治療の中心は、飲み込む機能を改善させるリハビリテーションです。しかし、それだけでは改善が見込めない場合、上に紹介しているような外

科的治療を選択することもできます。

当科では、患者さんのご希望を最優先して、手術を希望する方に安全で確実な手術を行っています。声を失うかもしれないことは重い決断になりますが、口から食べる楽しさを第一に考える患者さんには有効な治療法だと思います。



プラス
α

こころの健康維持① 仕事や学習、友人との電話、料理など、毎日行ういくつかの活動と時間を決めましょう。

チーム医療を知ろう

今回のテーマ

摂食嚥下栄養サポートチーム

多職種が一丸となり、安全に食べ・飲み込めるよう、適切な栄養状態が保てるよう、総合的に支援します。

「嚥下・栄養・口腔」という 3つの専門チームが、 役割を分担し、連携して活動。

病気を治し、体を維持する上でも、生きる楽しさを感じる意味でも「口から食べて、栄養を摂取する」ことはとても大切です。しかし、高齢や病気になると、筋力低下や機能障害の影響で「食べること・飲み込むこと」がうまくできなくなり、誤嚥(ごえん)を繰り返したり、食欲自体が低下したりすることがあります。

当院の「摂食嚥下栄養サポートチーム」は、そうした患者さんの「食べる(摂食)・飲み込む(嚥下)」をサポートし、栄養状態を管理する専門部署です。当チームは、飲み込みの状態の評価・改善などを行う「嚥下チーム」と、食事などを工夫し栄養状態の改善をめざす「栄養チーム」、口腔内の環境を整える「口腔チーム」の3チームで構成されており、お互いに連携しながら、総合的な支援を行っています。



さまざまな職種が協働し、 飲み込みや栄養に対する、 多角的な支援を実施。

当チームの支援は、病棟看護師による入院時のスクリーニングから始まります。このスクリーニングはすべての入院患者さんが対象で「飲み込み、栄養、口の問題」という3つの観点から評価を行い、低栄養や誤嚥などの課題がある方を洗い出すというものです。その結果、支援が必要と判断された患者さんに対しては、専門チームが介入。定期回診やカンファレンスを行いながら、嚥下機能の検査、食事や姿勢の調整、リハビリテーションなど、さまざまな角度からサポートしていくのです。

もちろんこうした支援は、一職種だけで実現できません。当チームには、医師、歯科医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、リハビリ職、歯科衛生士などの専門職が所属し、専門性を活かしながら、協働して支援を行っています。



Staff's message



摂食嚥下障害看護認定看護師
西嶋久美子(左)

管理栄養士
鶴田 恵(右)

**今後も支援機能を高めていきます。
皆さんも予防を心がけましょう。**

摂食・嚥下や栄養状態に問題がある患者さんに対しては、何か1つを改善すればよいというのではなく、食事内容や、姿勢、筋力、口腔環境など、さまざまな課題に対し、総合的にアプローチする必要があります。当院が「嚥下・栄養・口腔」という3つのチームを集約したのは、まさにこうした患者さんに対し、多科、多職種が一丸となってサポートできる体制を整備するためです。

当チームではこれからも、入院中のサポートはもちろん、さらに入院前・退院後を意識した支援を行い、地域に向けた啓発活動などにも力を入れていきたいと思っています。最近では、低栄養の高齢者も増えています。皆さんも加齢のためと片づけず、普段から栄養摂取や運動、口腔ケアに力を入れていただければと思います。



プラス
α

こころの健康維持② 食欲が無くても、時間が来たら少量でもいいので何かを口にしましょう。

地域医療を学ぼう！

地域で取り組む 高齢者の口腔ケア

口腔ケアは生活の質に直結する重要なケア。
健康寿命の延伸をめざし、地域での活動が始まっています。

✓ 口の中だけでなく、
全身の健康に影響を及ぼします。

口腔ケアは、狭い意味では「口の中を清潔にする」という意味で使われることもありますが、一般的には「歯の手入れ」や「咀嚼・嚥下のリハビリ」などを含む広い概念として用いられます。

高齢者が健康を維持し、自立した生活を続けていくためには、適切に口腔ケアを行うことが非常に大切です。食べる・飲み込むなどの口腔機能が低下したり、義歯や口の乾燥が原因で口腔内に細菌が繁殖したりすると、食事が減って栄養状態が悪くなるだけでなく、誤嚥性肺炎をはじめとした感染症や、低栄養による運動機能・活動量の低下、認知症の進行など、全身の健康に悪影響を及ぼすことが指摘されています。

口腔ケアを
しないと…

歯や義歯の不調

食欲不振

嚥下機能の低下

唾液分泌量の
低下
(口腔内細菌の
増加)

免疫力の
低下

誤嚥性
肺炎

低栄養

筋量・
活動性の
低下

免疫力の低下

筋量・活動性の低下

岡崎市民病院では？

当院では、岡崎市の事業の一環として、主に認知症の方を対象とした口腔ケアを、地域とともに行っています。その1つが施設に対する専門職の派遣です。当院と地域の医師会、歯科医師会、リハビリスタッフなどが協力して、人的資源が充分ではない介護施設に対し専門職を派遣。食事時の回診やアドバイスなどを行い、サポートしています。2つ目は「お口の

行政や地域の医療職、職能団体とともに、
口腔ケアの充実に努めています。

衰え」の予防です。地域の言語聴覚士と共同で「岡崎モグザえもん体操」という口の体操を作り、行政の協力のもと「ごまんどく体操(岡崎市の介護予防体操)」の参加者を中心に広めています。岡崎モグザえもん体操は、当院ホームページの摂食嚥下栄養サポートセンターページにも掲載されていますので、気になる方はぜひやってみてください。



言語聴覚士 田積匡平(左)、長尾恭史(右)

岡崎
モグザえもん体操は
こちらから！



TOPICS

TOPICS 01

ポスター展示でがんへの理解を。
がんイベント「がんを知ろう」を開催。

令和2年11月4日、1階中央受付横で、がんセンター運営委員会と緩和ケア委員会が共同で、がんイベント「がんを知ろう」を開催。コロナ禍での開催となった令和2年度は、感染対策を十分に講じた上で、ポスター展示と相談対応を行いました。今回のメインテーマは、婦人科の子宮がんや卵巣がん。来場者のなかには、一枚一枚、熱心にポスターに見入る方、パンフレットを持ち帰られる方、ご家族の療養について相談される方などがいらっしゃいました。今後も患者さんやご家族の方に、がんについて知っていただける機会を作っていきたいと思います。

バルーンアートは、
それぞれのがんの
イメージカラーに



イベント後、
1階の渡り廊下にも
掲示

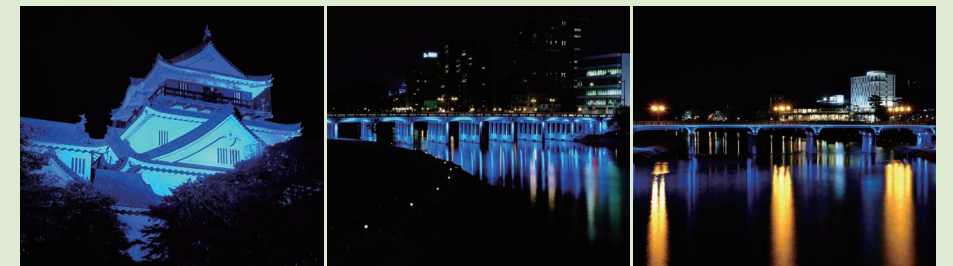


TOPICS 02

世界糖尿病デーのイメージカラー〈ブルー〉で
岡崎城、殿橋・明代橋をライトアップ。

毎年、11月14日は世界糖尿病デー。世界各国の建造物が、糖尿病予防啓発のイメージカラーであるブルーにライトアップされます。岡崎市民病院でも、広く市民の皆さんに糖尿病に関する適切な知識を持っていただくことを願い、令和2年11月9日～15日の1週間、岡崎城、殿橋・明代橋のブルーライトアップを行いました。

糖尿病は、日本でも有病者と予備群を合わせた人数が、2000万人ともいわれる生活習慣病です。皆さんもこれをきっかけに糖尿病に関心を持っていたが、生活習慣の改善と糖尿病予防に努めていただければ幸いです。



岡崎城、殿橋・明代橋のライトアップ



世界糖尿病デーロゴ

20分で聞けちゃう！旬の健康情報

FMおかざき「イブニングワイド」で
医師や看護師などが健康情報を発信！

FMおかざき「イブニングワイド」の「いまどき旬」コーナーでは、月に1回当院の医療スタッフが出演しています。令和2年11月5日は、内分泌・糖尿病内科 統括部長の渡邊 峰守より「withコロナ時代における糖尿病との付き合い方」を、令和2年12月3日は、母性看護専門看護師の早瀬 麻観子より「地域で見守る“子育て”&“親育て”」についてお話ししました。今後もぜひご期待ください。



これまでの
放送内容は
こちらから！



放送予定

令和3年
1月28日(木)

高度急性期医療におけるチーム医療
臨床工学室 技士長 木下昌樹

令和3年
2月25日(木)

小さな命と親子の絆を守るーNICU 最前線ー
新生児集中ケア認定看護師 竹内久美子

令和3年
3月11日(木)

診療放射線技師とは？是非お伝えしたいこと
放射線室 主任 鈴木貴之



日本医療マネジメント学会学術総会〈優秀演題賞〉2年連続受賞。 地域の方の「食べるを守る」取り組みが評価されました。

当院の摂食嚥下栄養サポートチームで活躍する、理学療法士の静間美幸、言語聴覚士の長尾恭史が、日本医療マネジメント学会学術総会で地域連携の取り組みを発表し〈優秀演題賞〉を受賞しました。同学会は、医療の質の向上を目的として活動する学会員により、毎年開催されているものです。地域の医師会、歯科医師会、行政、地域の医療職とともに、地域の皆さんの「食べるを守る」取り組みが評価され、令和元年度、令和2年度と、2年連続の受賞となりました。

受賞内容

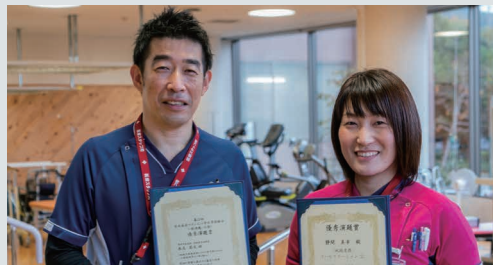


「食」を通した多職種地域連携

第21回日本医療マネジメント学会学術総会
優秀演題賞(令和元年7月20日) 静間美幸

地域多職種連携による介護予防のための 口腔運動導入の取り組み

第22回日本医療マネジメント学会学術総会
優秀演題賞(令和2年10月7日) 長尾恭史



言語聴覚士 長尾恭史(左)、理学療法士 静間美幸(右)

光線療法

乾癬、アトピー性皮膚炎など 難治性の皮膚症状を改善。

「治療は受けているものの、皮膚症状がなかなかよくなりません」とお困りの方はいらっしゃいませんか? 当院の皮膚科では、難治性の尋常性乾癬やアトピー性皮膚炎などに対して、日本皮膚科学会専門医の西田絵美医師による光線療法(紫外線療法)を行っています。飲み薬や塗り薬ではなかなか良い効果が得られなかった患者さんでも、光線療法の併用によって改善していくことが可能です。

皮膚疾患によっては、保険診療対象となりますので、より積極的な治療をご希望の方は、かかりつけ医にご相談ください。

光線療法の主な適応疾患

- 尋常性乾癬
- アトピー性皮膚炎
- 尋常性白斑
- 掌蹠膿疱症

全身型
紫外線治療器



INFORMATION

岡崎市医師会健診

オプションメニューに当院のPET-CT検査を導入。

岡崎市医師会健診のオプションメニューに、PET-CT検査(※)が追加され、当院では、令和2年12月より受診可能となりました。
※がんの性質を利用しがんを見つける最新の検査

救命救急センター

救急外来でのインフルエンザ検査中止のお知らせ。

新型コロナウイルス感染症が拡大していることから、原則として当院の救急外来では感染リスクの高いインフルエンザ検査を行いません。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

病院広報誌 特設サイト



こちらから



地域の皆さんや連携機関の皆さんと「岡崎市民病院」を情報で繋ぐ、広報誌連動型コミュニケーションサイト。ぜひご覧ください。

LINE〈公式〉アカウント

病院広報誌「つながる」のLINE〈公式〉アカウントを開設しました。QRコードから「友だち追加」をお願いいたします。



岡崎市民病院
OKAZAKI CITY HOSPITAL

〒444-8553 岡崎市高隆寺町字五所合3番地1
TEL 0564-21-8111 <https://www.okazakihospital.jp/>



2021
No.04 1月号

発行責任者／院長 早川文雄 発行／岡崎市民病院 広報グループ 記事提供／中日新聞広告局
編集協力／プロジェクトリンク事務局 発行日／2020年12月25日